

## 経済学に関するある思い

千葉の県人 鎌田 留吉

フランスの経済学者トマ・ピケティの「21世紀の資本論」が話題になっている。アメリカで本年4月に発売されるや、40万部以上を売り上げ日本でも12月に翻訳の運びとなるらしい。私はいくつかの書評をよんだだけでありその中身につき云々する資格はない。

私がここで取り上げるのは、経済学に関して去来する或る思いである。広岡裕児氏の書評によると、ピケティは1971年5月にパリで生まれ22歳（1993年）でパリとロンドンで博士号取得した大秀才だ。その後すぐにマサチューセッツ工科大学に准教授として迎えられた。初めてのアメリカだった。「私は夢を実現した。」ところが「すぐにフランスそしてヨーロッパに戻りたいと思った。アメリカの経済学の実情に失望したのである。」「格差についての歴史的データ収集は行われていなかったにもかかわらず、専門家たちは純粋な理論の結果だけを並べたてていた。」「経済学は数学と純粋理論的な思索への幼稚な情熱から脱却出来ておらず、またさ、しばしば非常に思想的であった。」「小さな数学的な問題を気にしていた。そのことによって安易に科学性の見かけが与えられ、彼らが取り囲む世界が提起する遥かに複雑な問題への回答を避けることができた。」

このピケティのアメリカ経済学への反応を読んで私はすぐに中谷巖氏の「資本主義はなぜ自壊したのか」という本を思い出した。100年に一度といわれたリーマンショックが起きて間もない2008年12月20日に初版され話題となった「構造改革の急先鋒であった著書が記す『懺悔の書』」である。そのなかで、中谷氏はこう言う。「27歳（1969年）のとき、サラリーマン生活に見切りをつけた私は、ハーバード大学に留学した。」「私の第一印象は『素晴らしいの』一語だった。」「死にものぐるいになって真面目に勉強すればするほど、アメリカ近代経済学の素晴らしいロジックの体系とそのその緻密さに私は圧倒されるようになった。やがて、私はアメリカ経済学の虜になり、とりわけ、（一定の仮定のもとに展開される）マーケット理論の精緻さ、理論体系全体の完成度の高さには敬意を表するようになっていった。」（因みに中谷氏の同書にはピケティの2003年の論文から「米国所得上位1パーセントが全所得に占めるシェア」のグラフを引用している。）

中谷氏がハーバード大学に留学した1969年という年は、日本全国で学園紛争の嵐が吹き荒れ、東京大学の入試が中止になった年である。私が入った東北大学でも入学式にいわゆる全共闘系の学生たちが乱入し、入学式は破壊された。前期の教養学部の経済学はマルクス経済学一色であった。近代経済学のキの字もなかった。私はマルクスの猛勉のエピソードに感激し、「下部構造が上部構造を規定する」などと大内秀明先生から学んだ。

その前年（1968年）、先般亡くなられた宇沢弘文氏がシカゴ大学から東大に戻られ1969年に教授になった。市場原理主義者のフリードマンとの闘いに敗れたのだと自称していた。

それから45年。市場原理主義者たちへの疑念が広がりつつある中で、共和党が大勝した。オバマ大統領の外交政策への批判が主因らしい。

果たしてこれから経済学はどのような方向に向かうのだろうか？ 2014.11.17. 記